

本日の聖書箇所には、徴税人ザアカイがイエスと出会い、救われていく場面が記されています。徴税人は、ユダヤを支配するローマ帝国に雇われていましたから、それを楯にとって、同胞であるユダヤ人からいくらでも税金をだまし取り、私腹を肥やすことが出来たようです。それ故、徴税人は、敵国に魂を売る裏切り者、税金をだまし取る犯罪者としてユダヤ人から大変嫌われていました。ザアカイも、人々から「罪深い男」（7節）と呼ばれていますから、例外ではなかったことが分かります。「嫌われて当然だ」「自業自得だ」というのが、ザアカイに対して向けられた周囲の目であり、私たち読者の正直な気持ちでもあるでしょう。それでもなお、このザアカイがイエスによって救われる話は、昔から多くの人の心を引きつけ、語り継がれてきたのでした。何故？

イエスは、ザアカイに対して「失われたものを捜して救うために来た」（10節）と語ります。ザアカイが失いかけていたもの…それは、私という存在価値であったと思います。存在する者に対する最大の侮辱、それは「存在するな」というメッセージです。そのような言葉や態度（無視）ほど、人が傷つき、死にたくなるものはありません。「お前など生きている価値がない」という周囲からのメッセージの中で、ザアカイの存在も消えかかっていたのではないのでしょうか。そうなると、悪循環。彼にできることは、せめて見事に詐欺を働いて、必死に財力を溜め込み、周囲に見せつけ、「自分は透明人間じゃない」とその存在を誇示することしかなかったのかもしれない。背の低い境遇にあった彼が、イチジク桑の木に登ってイエスを見ようとしたことにも、「自分はここにいる。見てください。私は消えてなんかいませんよね」、という心の叫びを聴くような気が致します。イエスは、彼の存在に気づいて言われました。「ザアカイ、急いで降りて来なさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」（5節）。私という存在価値への不安…このザアカイが抱えていた心の穴に、イエスの呼びかけはピタリとはまります。そして、このことが、ザアカイの生き方を自ずと人を愛する方へと変化させていくのでした（8節）。

結果次第で、その人の存在価値が左右するような社会に生きている私達…イチジク桑の木に登り、「自分はここにいる。見てください。私は消えていませんよね」と心の中で必死に叫んでいます。そんな私達の名を呼んで、主イエスは語っておられます。「あなたは消えてなんかいない。あなたは、私の目に価値高い。急いでそこから降りてきなさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」。

（文責：望月達朗牧師）

